

## 携帯電話と現代の青少年のコミュニケーション

―「青少年と携帯電話等に関する調査研究報告書」(平成12年12月総務庁青少年対策本部)より―  
山本 功(淑徳大学講師)

本稿は、平成12年度に総務庁青少年対策本部内に設置された青少年環境問題調査研究会による調査研究報告をもとに、現代の青少年のコミュニケーションのあり方について考察を行う。同研究会の構成は、委員長：矢島正見(中央大学)、学識経験者委員：佐々木輝美(獨協大学)、田村雅幸(科学警察研究所)、耳塚寛明(お茶の水女子大学)、米里誠司(科学警察研究所)、山本功(淑徳大学)であった。調査は平成11年11月から12月にかけて宮城県、千葉県、東京都、石川県、奈良県、熊本県の6都県の高校生に調査票を配布し、3,101名から有効回答票を回収した。総務庁青少年対策本部より調査報告書が刊行されている。また、佐々木輝美獨協大学教授による論考「携帯電話の所有と青少年のコミュニケーション行動」が財団法人青少年問題研究会『青少年問題』第48巻4号(平成13年4月号)に掲載されている。併せて御参照いただければ幸いである。

### 1. はじめに

高校生が携帯電話で話しているのが珍しいものではなくなってどれくらいになるだろうか。すでにそうした光景は日常のものとなっている。

ところで、彼らが持っているものが携帯電話であるかどうかは遠目には、実は分からない。それはPHSかもしれない。携帯電話に比べPHSの方が音質がよく、データ転送速度が速く、電波が弱いので消費電力が少なく、そして何よりも通話料が安くすむというメリットがある。そのかわり、移動中の通話(電車内や自動車内)がひどく困難かほとんど不可能、建物内などの場所によっては通話圏外で使えないこともある、というデメリットがある。

実は筆者が持っているものは携帯電話ではなくPHSである。携帯電話の調査研究をするにあたって無理矢理持たされたものである。だが、東京で暮らしている分にはほとんど不便はない。使えない場所はさほどないし、電車などで移動中には使えないだけだ。車内アナウンスが警告するまでもなく、そもそも電車内で使う方がどうかしている。何より安い。にもかかわらず、高校生や大学生が持っているものの半分はPHSではなく、携帯電話である。【図1を適宜挿入】

なぜだろうか。知っている高校生に、どうしてPHSではなく携帯電話なのかたずねたことがある。「いつでも繋がっている安心感が欲しいんですよ」という答えが返ってきた。秀逸な答えであろう。そうした感覚を言語化できる高校生は多くはいない。彼ら彼女らにとって携帯電話は、単なる道具としての電話ではないのであろう。家にある電話で「安心感」をもつことはないだろうから。友人関係をつくり出し、維持するための重要な道具として、携帯電話は不可欠になっているのである。

図1をご覧ください。今から2年前の時点で、男子高校生の5割、女子高校生の7割、全体では6割が携帯電話等を持っている。今日ではこの割合はもっと高くなっているであろう。

### 2. 携帯電話と友人関係

携帯電話の登場によって、青少年のコミュニケーションはどのように変わったのだろうか。図2をご覧ください。【図2を挿入：レイアウト次第で適宜】これは、携帯電話を持つことによって友人関係がどのように変化したかたずねた結果である。94%が「連絡がとりやすくなった」と答えている。

これは携帯電話の本来の機能であろう。そうでなければ、携帯電話の意味がない。

約半数が、「友人とよく遊ぶ」ようになり、「電話をする時間が増え」「新しい友人が増え」「友人との仲が深まった」と答えている。携帯電話はおよそ所持した者の半分に、人間関係を広げ、強化する機能を果たしたと自覚されている。

しかし、注目したいのは、5人にひとりが「電話に出る相手を選ぶように」なり、そして6人にひとりが「会ったことのない携帯電話だけの友人が増えた」と答えていることである。この点は、携帯電話の「意図せざる結果」、いわば副作用であろう。一方では確かに携帯電話は友人関係を広げ強化する方向で作用したわけであり、他者とのつながりを太くしたのである。だが他方で、その時その時に電話に出るか否か - - 携帯電話のディスプレイには誰からのコールかが表示される - -、選択することが可能になったわけであり、コミュニケーションの選択が可能になったということで、「個人主義」を促進する機能も果たしていると言える。各個人はその場その場で、かかってきた電話に出るか否かの選択が可能になったのである。逆に言えば選択を迫られる、あるいは強いられることになったとも言える。このように考えてみると、携帯電話は人間関係を強化する一方で、コミュニケーションに際して個人の選択を強いる道具と言える。

先ほどの高校生が口にした「いつでも繋がっている安心感」を欲しているということは、裏返せば繋がっていなければ不安でしょうがない、ということである。対面的な人間関係だけでは獲得できない「安心感」を得る道具として携帯電話が必要なのであろう。その「不安感」の正体が何なのかは本稿では手に余るが、重要な問題であることは間違いない。

さらに注目したいのは「会ったことのない携帯電話だけの友人が増えた」とする回答であり、15.9%が「そう思う」と答えている。「どちらとも言えない」とした回答も25.9%となる。「どちらともいえない」ということは、少なくとも「電話だけの友人」がいるということであり、両者の計は41.8%となる。実に5人にふたりである。年配の方は「電話だけの友人」という表現を奇妙に思うかもしれない。しかし、それ自体は例えばかつて雑誌にあった「文通コーナー」のようなものを考えれば、さして不自然なものとは言えないであろう。また、携帯電話のみならず、インターネットの利用があたりまえのようになっている昨今（今やインターネットを使えなければ大学生は就職活動できないのであり、大学の教員はコンピュータを使いこなす能力を学生につけさせるという仕事もかかえている）直接会ったことのない人間を「友人」というくりに入れる感性を必要以上に不気味に思うのもいかなものであろうか。

とはいえ、「電話だけの友人」というものの言い方は、やはり何かしら奇妙なものがなくはない。最大の問題は、相手が本当はどのような人間なのか、保証が得られないということであろう。携帯電話を所持している高校生の4割がそうした関係をもっているということには留意しておくべきだろう。

しかも今日では、電話としての機能以上に、メールや掲示板の利用など、情報端末としての機能の重要性が増しているように思われる。この調査によっても、携帯電話所有者の9割以上が、1日1回以上メールのやりとりをしているという事実が分かっている。1日10回以上送受信するという回答も4割を超える。

「出会い系サイト」にみられるように、対面的な人間関係ではないようなつながりが十分ありえる、ということをおさえておかななくてはなるまい。これは必ずしも携帯電話による社会の変化というわけではなく、による電子ネットワークの発達によってもたらされた重大な変化である。

### 3. 携帯電話と家族関係

ここでは家族関係の変化について検討してみたい。図3をご覧ください。【図3を適宜挿入】8割以上が「連絡がとりやすくなった」と答え、5割以上が「家族が安心するようになった」と感じている。そして6割以上が「帰宅時間が遅いと親から連絡がくるようになった」としている。こうしてみると、携帯電話は家族にとっても便利な道具であり、また家族を安心させる機能を果たしているようでもある。

しかし、2割弱が携帯電話を持つことによって「自分の居場所についてうそをつくようになった」と答えていることに注目しよう。男子の12.2%、女子の20.0%がこう答えている。してみると、親にとって、携帯電話は子との連絡を容易にさせる反面、かえって子の動向を不可視化させる結果になったのではないだろうか。事実、この調査で携帯電話を持っている高校生の親に「子どもが誰と電話で話しているのか分からなくなった」と思うかどうかをたずねている。22.8%の親が「そう思う」と答えた。

かつて電話は一家に一台、玄関先や居間にあった。それが今や、個々の子どもが持つという事態になりつつある。友人に電話をかければ、その家族が出て、それなりの対応をしなければならぬということがなくなるのである。そして親は、子がどのように携帯電話を利用して、どのような人間関係をつくっているのか、把握しきれぬものではないだろう。図4をご覧ください。【図4を適宜挿入】

携帯電話をもつことによって、「夜中に電話がくるようになった」とどうかを、高校生とその親にたずねた結果を示している。5割以上の子は「そう思う」と回答しているのに対し、親は3割前後しかそうは思っていないということがわかる。その差である2割の親は、子に対して夜中に電話がかかってきていることに気づいていない、ということであろう。親から目に見えないつながりを、子はつくりやすくなったのである。

#### 4. 携帯電話費用とアルバイト

ところで、どれくらい高校生は携帯電話代を使っているのだろうか。一ヶ月に「電話会社から請求される料金」をたずねたところ、約半数の45.7%が4～6千円台の金額を答え、1万円以上と回答したのも約2割、18.7%にのぼった。この金額は高校生にとっては決して軽い負担とは言えないだろう。

さらに、「料金は誰が負担していますか」とたずねたところ、「全額自分が出している」という回答が33.4%、「全額親に出してもらっている」が31.5%、「自分と親で出し合っている」が19.2%であった。答えにくい質問だったのであろうか、無回答が他の質問と比べ15.9%と、非常に多くなっている。「全額自分」あるいは「自分と親で」と答えた956人に、さらに費用の出所をたずねたところ、「こづかいの範囲内」というものが47.6%、「アルバイトして」が43.8%であった。

前節では携帯電話によるコミュニケーションの変化を考察したわけであるが、実は携帯電話を維持しえるための客観的条件として、費用の捻出がある。そこで、高校生のアルバイトと携帯電話等の所持の関係を分析してみた。それを示したのが図3である。【図5を適宜挿入】

これは、「ふだん学校のあるときに（夏休みや冬休み以外に）アルバイトをしていますか」とたずねた結果である。図をごらんいただければわかるように、男女とも、携帯電話等を持っている高校生はアルバイト率が3割前後となっている。持っていない高校生の1割弱と比べて、明らかに高い。さらに詳しく分析すると、アルバイトしている日数も多いことがわかる。「週に4日以上アルバイトしている」割合をみると、持っていないものは1～2%にとどまるのに対し、所有者では男子12.1%、女子8.8%と、1割前後になる。アルバイト代の平均金額をみると、所有している男子44,571円、所有

していない男子 34,655 円、所有している女子 33,912 円、所有していない女子 26,082 円となる。男女ともに、携帯電話を所有しているものはそうでないものに比べ、長い時間をアルバイトに費やし、より多くのバイト代を得ていることがわかる。

従来、携帯電話の普及によるコミュニケーションの変化が注目されてきたが、目に見えるそうした現象の背景に、客観的条件としての経済、ようするに「カネ」の問題があることを見過ごしてはならないだろう。携帯電話を維持するためにアルバイトをしているのか、アルバイトしているから携帯電話を持てるのかは、このデータからはわからない。だが、携帯電話所有者の3割がふだんからアルバイトをしている、という事実は注目すべき事実であろう。

電子メールやインターネットといった通信技術の発達によって、青少年が仮想現実の中に生きようになり、現実との区別ができなくなっている、という議論がときおりあるが、筆者はそうは思わない。むしろかつての生息範囲を越えて、ダイレクトに学校の外部とつながっているとみることもできるのではないだろうか。そのことをどう評価するかはいちがいには言えない。個々の高校生にとってプラスの経験であることもあれば、よからぬことを学習する契機であった可能性もある。

## 5. おわりに

携帯電話が便利な道具であることは間違いない。電子ネットワークによる通信技術もそうである。その恵沢を否定し、新しい技術を葬り去ることはできない。だが、新しい薬には未知の副作用がついてまわる。この調査によって、薄々感じ取られていた副作用がいくぶんか明らかにできた。新しい薬をまるごと否定するのではなく、その効能を見きわめた上で、うまく制御することが大人に求められている。その本稿がその一助となれば、幸いである。

図1 男女別携帯電話等所持状況

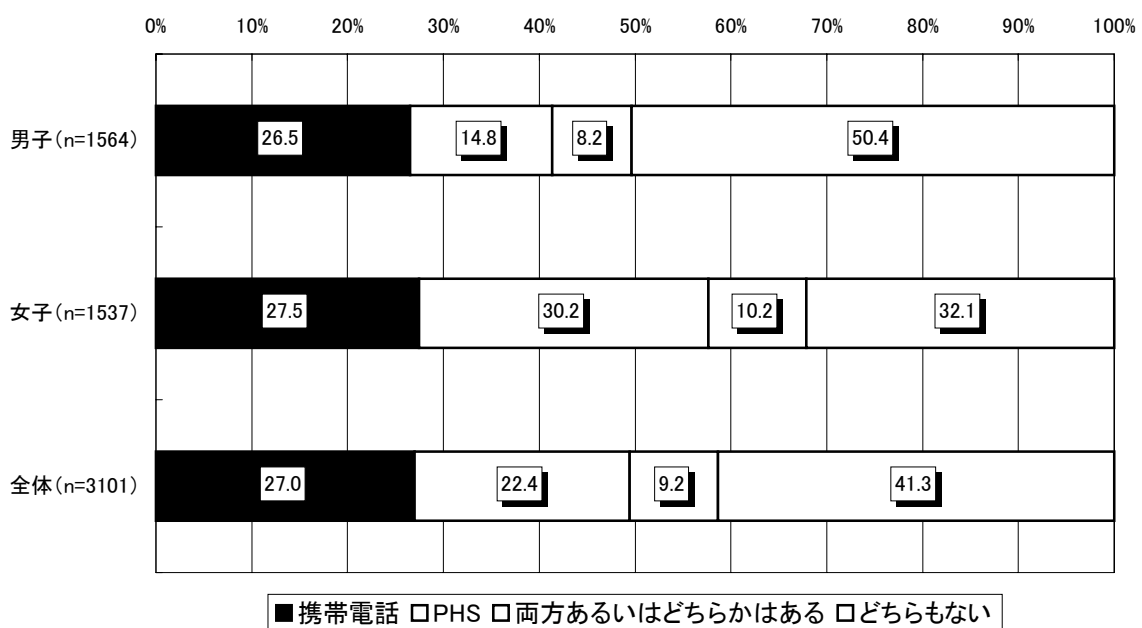


図2 友人関係の変化(N=1819)

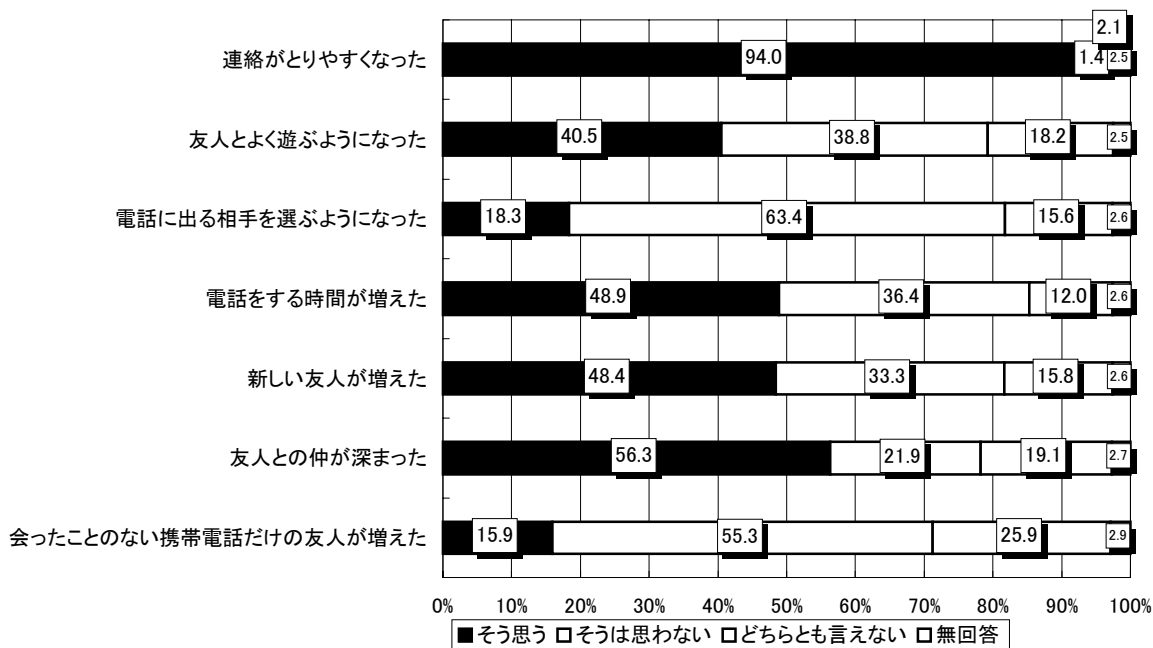


図3 家族関係の変化

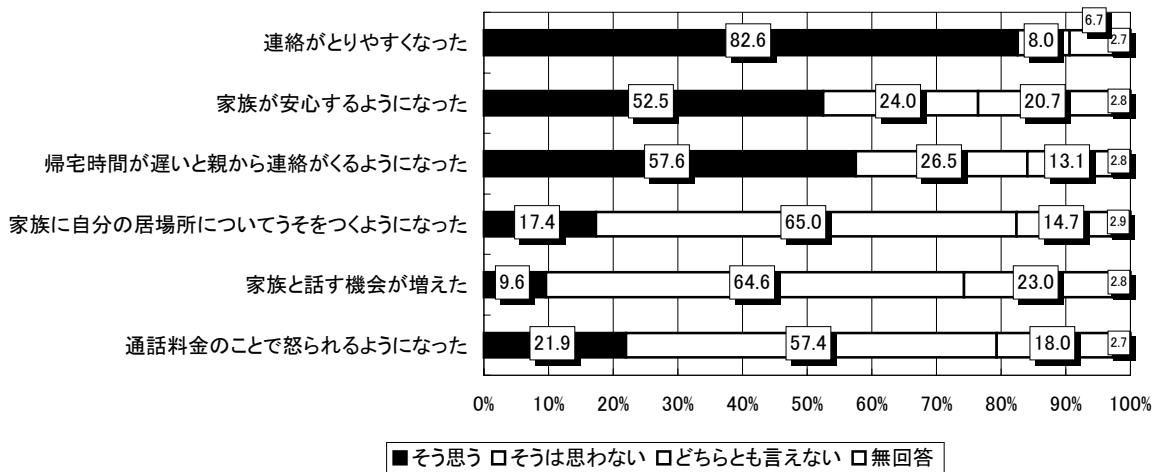


図4 「夜中の電話」が増えたかどうかの認知

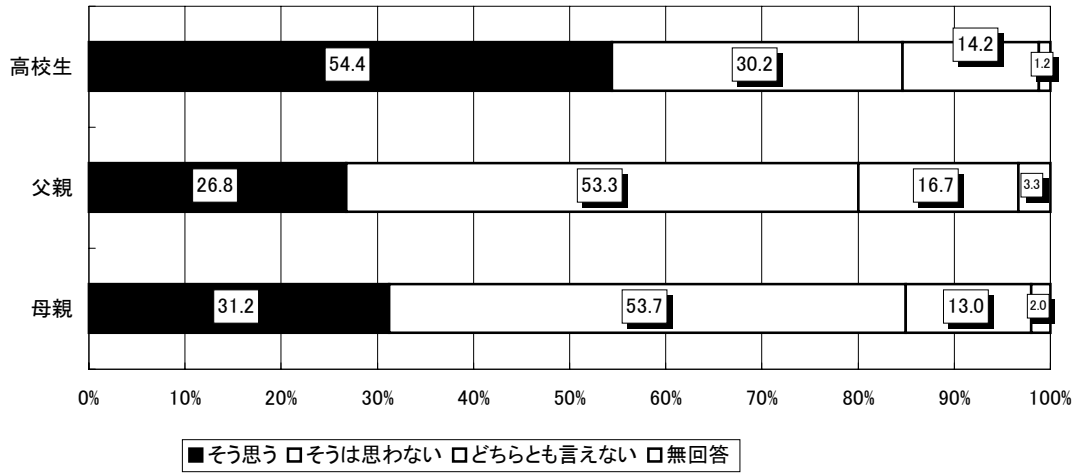


図5 携帯電話の有無別アルバイト状況

